

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

ヨハンナ・シュピーリ作『ハイジ』の研究(IV)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2003-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/823

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



ヨハンナ・シュピーリ作 『ハイジ』の研究 (IV)

南 は る つ

第1章 『ハイジ』における翻訳本の問題

序

『ハイジ』の第1部が刊行されてから、今年で123年になる。しかし今だにその人気が衰えることはない。インターネットにもサイトがあり、『アルプスの少女』ショップが池袋に開店したのもここ数年のことである。『ハイジ』といったいどんな関わりがあるのか疑問であるが、長野県ではおみやげものの店にアニメキャラクターの絵柄のついた箱や缶入りのお菓子が発売されている。さらに最近では『ハイジ』をイメージした入浴剤のコマーシャルが放映されている。アニメーションも何度も再放送されているため、年齢を問わず『ハイジ』は人気がある作品である。しかしアニメーションの人気と反して、本屋で『ハイジ』の翻訳本を目にすることがあまりないのも事実である。原作とこの翻訳本、そしてアニメーションとの相違点がかなりあるということはあまり知られていないであろう。日本では1920年に野上彌生子が翻訳したのを初めとして、この80年の間に150版近くの訳本が刊行されている¹⁾。特に1950年代から1980年代の40年間は全盛期で、この間に約100版近くの翻訳が刊行された。その中にはドイツ文学者による翻訳本だけでなく、日本文学者の書き下ろしといってもいい作品が含まれている。しかしその中には原作と著しく異なる点が多い作品がある。その中では特にフランクフルトでの生活が大きく変えられている傾向がある。今回はその中からいくつかの作品を取り上げて問題点を考察してみたい。

注

1) 参考資料参照のこと

第1節 ロッテンマイヤー女史

ゼーゼマン家で召使いの監督をし、クララを教育しているロッテンマイヤー女史は、その呼び名からしてさまざまな問題点がある。というのは原作では

「ロッテンマイヤーさんはこの家のおくさまが亡くなってから何年もの間ゼーゼマン家にいて、家事をきりもりし、雇い人の監督をしていました。ゼーゼマンさんはたいてい旅行に出ていて、家のことは全部ロッテンマイヤー女史さんにまかせていました……。」

>> Fräulein Rottenmeier war schon seit mehreren Jahren, seitdem die Dame des Hauses gestorben war, im Hause Sesemann, führte die Wirtschaft und hatte die Oberaufsicht über das ganze Dienstpersonal.
Herr Sesemann war meistens auf Reisen, übertließ daher dem Fräulein Rottenmeier das ganze Haus,<<¹⁾

と最初に説明されるだけで、特別な呼び方があるのではなく、「ロッテンマイヤーさん (Fräulein Rottenmeier)」もしくは「彼女 (sie)」と呼ばれているのだが、多くの翻訳の中で「家政婦」、「家庭教師」や、「女中頭」と呼ばれているからである。ひどい訳になると、「ばあや」という表現もある。彼女はこの家に仕えている身だが、当時亡くなったゼーゼマン夫人のかわりに一切合切を主人から任されており、彼女がクララに厳しい言葉を使っていることからわかるように、他の召使いたちとは違って身分が高い女性である。彼女の大きな役割はクララの教育で、いわば彼女は「教育係」である。勉強に関しては家庭教師が教えているが、その他の礼儀作法や精神的な部分での教育は彼女の責任である。日本語としての的確な言葉はないともいえるが、原作でも特別な身分を表す言葉があるわけではないのに、なぜ「ロッテンマイヤーさん」もしくは「彼女」と訳されずに、他の表現になってしまったのだろうか。特におかしい点を挙げると、まず第一に彼女が勉強を教えているわけではないので、「家庭教師」はおかしい。しかしこのように訳した本に本来の家庭教師は登場していない。第二に「女中頭」というのは全くあてはまらない。女中ではないのはもちろんであるが、「頭」というと他にも女中がいるように思われるが、この家の女中はチネットと呼ばれる女性1人である。第三に「家政婦」が一番近いが、彼女自身が家事をしているわけではないし、やはり召使いに近い存在に聞こえないだろうか。

ハイジを厳しくしつけ、夢遊病にまで追い込んでしまうロッテンマイヤー女史は、翻訳でも完全に悪者に描写されている。『少年少女物語文庫 アルプスの少女』(田島準子訳)ではロッテンマイヤー女史は「ばあや」として登場し、第7章の「ロッテンマイヤー女史のおちつかな

い一日」(Fräulein Rottenmeier hat einen unruhigen Tag) という表題が「ばあやの意地悪」と訳されている。原作ではハイジがフランクフルトに来た日に、ロッテンマイヤー女史がテーブルマナーや召使いとの応対について注意するのだが、この翻訳にはこの箇所も省かれている上、家出して連れ戻された後ハイジが元気がないのを見て、

「さすがのばあやも心配しました。子どものことだから、きれいな服でもこしらえてやったら、気がかわるかも知れないと思いました。」²⁾

という理由でハイジにどんな服がたりないのか調べるためにたんすを開け、そこで白パンを発見する。家出と白パンについて注意しただけで、なぜ彼女の行為が意地悪になってしまったのか。しかし原作ではこの後ハイジが現実と物語が区別できなくなって本を読んで泣いた時、ロッテンマイヤー女史から

「アーデルハイト、わけのわからないことで泣き叫ぶのはたくさんですよ。これだけは言うておきますが、また本を読んで一度でも泣き出すようなことがあれば、その本はとりあげますよ。ずっとね！」

>> Adelheid, nun ist des grundlosen Geschreis genug! Ich will dir eines sagen: Wenn du noch ein einziges Mal beim Lesen deiner Geschichten solchen Ausbrüchen den Lauf lässest, so nehme ich das Buch aus deinen Händen und für immer!<<³⁾

といわれ、ハイジは泣くことすら許されなくなってしまう、追いつめられて、ついに夢遊病になってしまうのだが、この本にはこの場面がないのである。このロッテンマイヤー女史の言葉の方がよほど意地悪に聞こえはしないだろうか。しかしここではハイジが追いつめられていった状況が非常に曖昧なため、夢遊病になった原因が明白になっていない。しかし前回の論文の中でも述べたが、ロッテンマイヤー女史は決して意地悪ではないのだ。彼女はハイジの行動を理解することができず、ただ市民階級であるゼーゼマン家を預かっている者として立派に任務を果たしているに過ぎない。それが結果として市民階級、および都会になじめないハイジを追いつめることになってしまっただけである。私利私欲は全く見られない。むしろこの物語における強欲な人間はデーテのみである。彼女はこの物語の中で、ハイジを山に連れてくる時と、フランクフルトに連れてくる時と、そして多くの翻訳では省かれてしまっているが、ハイジが山に帰される時にゼーゼマン家にほんの少し顔を出すだけなので、あまり目立たない存在のようである。しかし彼女はフランクフルトに連れていくわけをおじいさんに次のように言っている。

「……こうなれば、ハイジのまえにはどれほどの幸せが待っているかわからない。あの子がそこに行ってみんなにかわいがられて、万一お嬢さんに何かあった時には——とても病身なのですから、何が起こるかわからない、——そしてその家のみんなが子供がいなくてはさびしいと思ったりしたら、その子には聞いたこともない幸せが——。」

>> Nun könne gar kein Mensch wissen, was dem Heidi alles an Glück und Wohlfahrt bevorstehe, denn wenn es dann einmal dort sei und die Leute es gern mögen und es etwa mit dem eigenen Töchterchen etwas geben sollte — man könne ja nie wissen, es sei doch so schwächlich —, und wenn eben die Leute doch nicht ohne Kind bleiben wollten, so könnte ja das unerhörteste Glück <<⁴⁾

まるでハイジの幸せだけを願っているようにみせかけてはいるが、あわよくば自分も富を手に入れたという密かな願望がここにはっきりと現れている。全く教育を受けさせていないとおじいさんを責めるが、それならばなぜ自分の手元に置いておかなかったのだろう。おじいさんの暮らしぶりや村人たちの噂を聞けば、こうなることは容易に想像できたはずだ。すべてを周知の上だったが、ハイジのことなど考えもせず、ただ自分のためにハイジを手放したに相違ない。そんな彼女が、3年もたってからおじいさんに罵倒されるのもわかっていながらもとつぜん山へやってきて、半ば騙すようにして無理矢理ハイジを連れ去っていくのはなぜであろうか。おそらく彼女はハイジを世話した時点でゼーゼマン家からお金をもらっているに違いない。そしてハイジが山に帰ることになった時、ゼーゼマン家に呼ばれたので、いったいどんないい話があるのだろうと期待して訪問してきたが、全く彼女を失望させる話でもあったし、おじいさんに「もう二度と顔を見せるな。」と言われていたので、なんとかこの面倒な役目を断れないかとひたすら逃げ口上を並べたて、さっさと姿を消してしまい、それきりこの物語の中に姿を見せることはない。彼女は単にハイジを山やフランクフルトに連れていく役割を任っているだけではなく、私利私欲のみで動く、悪い大人の象徴である。

注

- 1) Johanna Spyri: Heidi • Lehr - und Wanderjahre, Cecile Dressler Verlag Hamburg 1993, S.93.
- 2) 田島準子訳 少年少女物語文庫9『アルプスの少女』1957年 集英社 S.76.
- 3) Johanna Spyri: A. a. O., S.171.
- 4) Johanna Spyri: A. a. O., S.83.

第2節 教会に道案内する少年

ハイジは山を見たくてゼーゼマン家を抜け出して教会の塔に登るが、その時出会うのが小さな手回しオルガン (eine kleine Drehorgel) を持って腕に奇妙な動物 (ein ganz kurios Tier) を抱いている少年で、彼は40ペニヒとひきかえに教会にハイジを連れていき、帰りにはゼーゼマン家まで送ってきてくれる。しかし彼の扱いも翻訳によって大きく異なっている場合がある。実はこの少年は翌日そのお金をゼーゼマン家にもらいにくるのだが、セバスチャンはクララのなぐさめになればとこの少年を家の中に入れ、ハイジとクララの前でこの手回しオルガンを演奏させる。その騒ぎを聞きつけたロッテンマイヤー女史が部屋の中に入ってくると、奇妙な少年と動物 (その正体はカメである) が動物嫌いの彼女を驚かせるという話だが、谷村まち子訳の『世界少年少女名作撰集 アルプスの少女』¹⁾ や小倉ゆり子訳『アルプスの少女』²⁾ では、この少年は道案内をしてゼーゼマン家にお金をもらいにくるものの、セバスチャンが「いまおじょうさまはお勉強中だからわしははらっておこう。」とあって、要求は4円だったのに、10円払ってすぐに追り返してしまう。また酒井朝彦訳『幼年世界名作全集 アルプスの少女』³⁾ ではハイジが教会の塔に登ることはなく、家を抜け出したハイジがいきなり子猫を連れて帰ってきて、翌日この少年がやってくるのだが、どういうわけか子猫はこの少年があげたことになっていて、道案内代が20円、子猫代が20円で合計40円を要求する。この他にも彼のもっている手回しオルガンがアコーディオンと訳されたり、奇妙な動物を連れていかなかったり、ハイジが教会の塔に登ることも少年も登場しない訳本や、この少年の存在なしにハイジは一人で教会に登ってしまう訳本もある。この少年のエピソードはユーモア溢れる、ロッテンマイヤー女史にハイジの頭がおかしいと思わせてしまう大切な1つのモチーフであるが、しかしこのエピソードが省略されてしまったり、またハイジが教会に登ったが、そこは屋根と塔と煙突ばかりでモミの木や花々を見ることはできなかった時のその失望感が全く描写されていないことは非常に嘆かわしい。

注

- 1) 同和春秋社, 1956年.
- 2) 中央出版社, 1959年.
- 3) あかね書房, 1956年.

第3節 野上彌生子訳『アルプスの山の娘』による訳本の問題点

日本において『ハイジ』を初めて翻訳したのは野上彌生子である。野上彌生子は1884年大分県臼杵町（現臼杵市）で生まれ、夏目漱石の教えを受けて小説を書き始めた。99歳で逝去するまで現役作家として、多数の作品を発表した近代女流作家の1人である。しかしながら野上氏にドイツ語の知識があったとは言えないので、この『アルプスの山の娘』は英語からの翻訳と考えられる。というのも所々にその痕跡が残されているからである。1950年代には40版近い訳本が出版されたがその中にはやはりドイツ語の知識があるとは思えない作家による書き下ろしともいえる作品が存在する。そしてその作家たちのほとんどがこの野上氏の翻訳を参考にしたのではないかと考えられる。吉田絃二郎訳の『世界名作全集23 アルプスの少女』¹⁾、谷村まち子訳『世界少年少女名作選集 アルプスの少女』²⁾、上田健次郎訳『保育社の幼年名作全集10 アルプスの少女』³⁾、小倉ゆり子訳『アルプスの少女』⁴⁾などがその例である。ここでは野上氏とこれらの訳者による作品を比較し、問題点を指摘したい。

注

- 1) 1952年、大日本雄弁会講談社。
- 2) 1956年、同和春秋社。
- 3) 1957年、保育社。
- 4) 1959年、中央出版社。

1. 通貨単位の問題

野上氏の翻訳では通貨単位のつじつまがあわない所がある。原作で通貨単位が表現されているのは、次の5つの値段である。

- ① 第1章において、ハイジの脱ぎ捨てた洋服をペーターが取りに言った時のお駄賃。5ラッペン硬貨（Fünfrappenstück）。
- ② 第7章においてハイジを教会に案内する少年がその料金として要求する金額。行きが20ペニヒ（zwanzig Pfennige）で帰りが20ペニヒ。合計40ペニヒ（vierzig Pfennige）。
- ③ 第14章においてフランクフルトからハイジが被ってきた帽子の値段。10フラン（zehn Franken）。
- ④ 第22章でパン屋が予想したペーターが嫉妬心から突き落としたクララの車いすの値段。

500フラン (500 Franken)。

- ⑤ 第23章でペーターが車いすを突き落としたことを反省したので、クララのおばあさまから記念としてもらうもの。10ラッペン (einen Zehner)

単位が違うのは、山の上で起こった事柄の値段はスイスの通貨、つまりフランとその下の単位のラッペン、フランクフルトで起こった事柄の値段は、ドイツの通貨、つまりマルクとその下の単位のペニヒであるためである。第1章の5ラッペンはただ「硬貨」とだけ訳されている訳本が多い。野上氏の訳本でも同様である。しかし野上氏の訳本ではその他の通貨単位がおそらく当時の子供にもわかるように日本の通貨に合わせて、ほとんどが「1銭」「2銭」「4銭」という単位に訳されているのだが、帽子の値段が「10マルク」、車いすの値段が数字も全く変えられて「25ポンド」と訳されているため、その単位が日本、ドイツ、イギリスの通貨の三種類が混合して使われてしまっている。また小倉氏も野上氏と同様に車いすの値段だけがポンドで記されている。いったいどうしてこんなことになってしまったのだろうか？ 日本の通貨に換算するのはいいとして、他の国の、ましてや全く関係のない国の通貨と混同して出てくるのは滑稽としか言いようがない。一方吉田氏は「セント」と「ドル」に直しているのだが、なぜアメリカの通貨にしたのだろうか？

また金銭に関する事柄がすべてなくなってしまう訳本もある。ペーターは自ら進んで洋服を取りに行っているし、フランクフルトの少年は「しんせつに」無料で道案内してくれる。また山に帰った時にゼーゼマン家からお金を受け取らないので、ペーターのおばあさんに白パンを買ってあげる話もない。ペーターは車いすを壊すが、それを噂しているパン屋の姿はなく、そのことを謝るのだが、記念品としてお金をもらうこともないというように徹底的に金銭の存在を打ち消している訳本がある。しかしその結果、シュピーリの描いた最後には金銭の力も借りてみんなが幸せになるという基本線からはずれてしまったことになる。

2. 「泉」の問題

第9章において、ゼーゼマン氏がクララと2人だけで話をするためにハイジに「水をもってきてくれないか。」と頼んで部屋から出て行かせ、ハイジは遠くの泉 >> Brunnen << まで水を汲みに行くという場面がある。この >> Brunnen << の訳が野上氏によれば次のように変えられている。水をもって帰ってきたハイジにクララはこう言う。

『『通りのポンプまで汲みに行つて來たの』クララはたづねました。『ええ、通りのポンプの水の方が新しいんですもの。……』』¹⁾

なぜ「泉」がポンプになってしまったのか。これと同様、吉田氏も「ポンプ」と訳している。

しかし奇妙なのは、ゼーゼマン氏が「なるだけ冷たい水」が欲しいと言っているのだが、それを探しにいった場面で、

「ハイジは、青い空の下に、こんこんとわき出ている冷たい水を想像して、門の外にかけだしました。

すこし行ったところで、ハイジは水をくんでいる人たちを見ました。しかし、それは泉の水でもなく、雪の下の岩の間からわき出てくる水でもなく、人間の手で作られたポンプの水だったのです。

『とてもきれいな水が、わき出るところはないのでしょうか？』

ハイジは、そこに立っていたおかみさんふうの女にたずねました。

『もったいない、この世界にポンプの水よりきれいな水がどこにあるものかね。』』²⁾

しかし苦労してポンプを見つけ、水を汲み、クララの主治医にも会うのだが、これを持って帰った時の場面がそっくり抜けてしまっている。「泉」という表現がありながら、なぜポンプにしてしまったのだろうか。それにどこからポンプの水がきれいな水だという話がでてきたのだろうか？ゼーゼマン家は大都会フランクフルトのお金持ちの家である。台所に行けばポンプがつかわれていただろう。ハイジが水を持って帰ってきた時に、クララもゼーゼマン氏も外の、それも遠くの泉まで行っていたことに驚いていることからゼーゼマン家にポンプがあったと推察することができる。同じポンプならば外の方が新しいということはないだろうし、簡単に水を汲むことができたであろうから、上述のようにポンプの水がきれいだと聞いた後にわざわざ遠いところに行った理由がなくなってしまう。

なぜハイジは外へ出かけたのか？それはゼーゼマン氏が「新鮮な水」を要求していたからに違いない。ゼーゼマン氏が

「私に水を一杯もってきてくれないかい？」

>> hol mir doch mal ein Glas Wasser. <<³⁾

と言ったのに対して、ハイジは聞き直しているのだ。

「新鮮なお水？」

>> Frisches? <<

しかし台所に出る水は冷たくなく、新鮮に感じなかったので「泉」へと向かったのである。ゼーゼマン氏にとってはハイジが出ていってくれば、たとえ水を持って帰ってこなかったとし

でも、またその水が新鮮であるかどうかなどは全く問題ではなかった。それをハイジは素直に聞き、わざわざ遠くの「泉」まで水を汲みに行った。これはハイジの実直さやひたむきさが描写されている重要なモチーフである。またロッテンマイヤー女史はハイジの頭がおかしいと言ったが、それに対してゼーゼマン氏がハイジの精神も頭も正常であると判断を下した要因にもなっているのであろう。

注

- 1) 野上弥生子 S.110.
- 2) 吉田絃二郎 S.89-90.
- 3) Johanna Spyri: Heidi • Lehr- und Wanderjahre, Cecile Dressler Verlag Hamburg 1993, S.146.

3. 「パン屋」の問題

ハイジが山に帰る時、マイエンフェルトからデルフリまで荷馬車に乗せてもらうのだが、それはデルフリの >> Bäcker << (パン屋) の馬車である。彼はおじいさんのことも知っていて、ハイジのかばんを預かってくれる。しかしこの「パン屋」が野上を初め、多くの訳本では「水車屋」あるいは「水車小屋の主人」と訳されている。ドイツ語では水車屋は >> Müller << といい、ここでの >> Bäcker << とはあきらかに異なるのだ。当時日本には「パン屋」という表現がなかったのか。否、そんな事実はないし、奇妙なことに「水車屋」と訳した同じ訳本の中に「パン屋」という言葉が存在しているのだ。実はこのパン屋はこの後もう一度登場する。彼はペーターがクララの車いすを突き落とした際、壊れた車いすを見てあれこれと詮索している。車いすの値段を推測するのも彼である。ところが奇妙なことに野上氏、および吉田氏の訳ではここでは「水車屋」ではなく、「パン屋」になっていて、まるで別人のように扱っているのだ。結果として同じ名詞でありながら、別の言葉に訳され、その間違った言葉が別の訳者による訳本の中で使われてしまっているのである。金銭、泉、パン屋等、いずれにしてもこれだけの間違いがあるのは訳者がドイツ語を知らずにこの作品を訳してしまった証拠である。

第4節 ゼーゼマン夫人

ハイジはロッテンマイヤー女史からゼーゼマン夫人がきた時には、>> Gnädige Frau <<

(奥様)と呼ぶように指示される。ところがハイジは今までこんな言葉を使ったことがないのでこの言葉の意味が理解できない。というのは >> Frau << というのは夫人につける敬称で「ーさん」にあたるのだが、>> Frau Sesemann << (ゼーゼマン夫人)のように名前の前につけるのが普通である。

>> Gnädige << は >> gnädig << という形容詞で、「崇高な」「尊大な」という意味である。つまり「崇高な夫人」という言い方をして、「奥さま」という意味になる尊称である。ハイジは >> Frau << を後ろにつけることを不思議に思っ、これはロッテンマイヤー女史の思い違いに違いはないと思ひ込んで次のように呼びかける。

>> Guten Tag, Frau Gnadige <<,¹⁾

それに対して

「おやまあ、」ゼーゼマン夫人は言いました。

「あなたのところではそういうの？ あなたの家の牧場でそう聞いたの？」

>> Warum nicht gar! << lacht die Großmama.

>> Sagt man so bei euch? Hast du das daheim auf der Alm gehört? <<²⁾

「さまおく。」というべきか、「グネーディゲさん」というべきか。確かにこの箇所は日本語には訳しにくい。省略している訳本が多いのだが、全く違う解釈をされる可能性のある訳をしている本がある。

① 『今晚は、奥さま。』

と云いかけたが、呼び捨ててはいけなかったと思ったので、もう一つ「さま」をつけて、『奥さまたさま』と挨拶しました。³⁾

② 『こんにちわ、おくさま、おくさま……。』⁴⁾

③ 『こんばんわ、おおおくさま。』⁵⁾ といったあと、

『こんばんわ、おおおくさま、さま』⁶⁾ といいなおしている。

④ ロッテンマイヤー女史が『ゼーゼマン大奥さま。』⁷⁾と呼ぶように指示したのに対して、
『こんばんわ、大奥さま』⁸⁾と挨拶している。

⑤ 『こんにちわ。大さまー。』⁹⁾

⑥ 『こんばんわ、おくさま。』¹⁰⁾

⑦ 『大おくさま』¹¹⁾

⑧ 『こんにちわ、おくさま』¹²⁾

ゼーゼマン夫人が到着したのは夕方なので、>> Guten Tag << の訳が「こんばんわ……」になっているのは間違いではないが、この挨拶に対するおばあさまの答えは原作とほぼ同じように訳しておきながらも、「奥さま」と言っているのは理屈に合わない。というのはハイジはこの呼び方でおばあさまが笑ったり、不思議に思うのは不自然であるし、いくらデルフリが田舎だといっても、「奥さま」という呼び方はあるだろうし、ロッテンマイヤー女史に指示された通りに言っているからである。「大奥さま」も同様に全く不自然ではないので、ここでは不適切である。またハイジは言い直しをしているわけでもないし、呼びかけではいけないと気をつけているわけでもない。

このモチーフはスイスで育ったハイジがこのような市民階級で使われているような言葉を耳にしたことがなかったために生じた間違いである。このたった一言のユーモラスな言葉の中にハイジの素朴さ、そしてシュペーリの言葉のセンスが見られるのと同時に、スイスの田舎と大都会の文化の相違が暗示されているにほかならない。

注

- 1) Johanna Spyri: Heidi・Lehr- und Wanderjahre, Cecile Dressler Verlag Hamburg 1993, S.152.
- 2) Johanna Spyri: A. a. O., S.152.
- 3) 野上彌生子訳:『アルプスの山の娘』1934年 岩波書店 S.115-116.
- 4) 吉田絃二郎訳:世界名作全集23 『アルプスの少女』1952年
大日本雄弁会講談社 S.94.
- 5) 酒井朝彦訳:幼年世界名作全集 『アルプスの少女』1956年 あかね書房 S.123.
- 6) 酒井朝彦訳:上掲書 S.123.
- 7) 谷村まち子訳:世界少年少女名作撰集 『アルプスの少女』1956年 同和春秋社 S.108.
- 8) 谷村まち子訳:上掲書 S.110.
- 9) 江間章子訳:名作絵文庫三年生 『アルプスの少女』1957年 実業之日本社 S.103.
- 10) 上田健次郎訳:保育社の幼年名作全集10 『アルプスの少女』1957年 保育社 S.110.
- 11) 小倉ゆり子訳:『アルプスの少女』1959年 中央出版社 S.102.
- 12) 瀬川しのぶ訳:ポプラ社文庫 『アルプスの少女』1979年 ポプラ社 S.83.

第5節 宗教の問題

ヨハンナ・シュピーリがこの物語を通して一番描きたかったのが「神への信仰」である。ハイジはフランクフルトでクララのおばあさまに神に祈ることを教えられ、その後アルムに帰ることができた時も、夕日を眺めながら神に感謝し、字を覚えたことによってペーターのおばあさんに賛美歌の本を読んであげ、牧師の説得でさえも全く聞き入れなかったおじいさんに神への信仰の素晴らしさを語って放蕩息子を読んできかせて社会復帰させ、さらに娘を失ったフランクフルトのクララの医者クラッセンの心を賛美歌と神への信仰心で慰め、クララが山にきた時には2人で星空をみて神に祈り、クララが歩けるようになった時には神に感謝する。いいことはすべて神のおかげである、悪いことの解決を神が聞き入れてくれないのはまだその時機ではないので、神を信じてじっと待っているのがいい、というのがシュピーリの志である。しかし訳本の中にはこの「神への信仰」が薄められたり、全く描かれていないものもある。

江間章子訳の『名作絵文庫三年生 アルプスの少女』¹⁾ではクララのおばあさまは字を教えるだけでお祈りすることは全く教えない。それゆえ当然おじいさんを社会復帰させることもなく、医者もこないで慰めることがない。せつかく字は覚えたのだが、ペーターのおばあさんに賛美歌を読んであげることすらないのだ。信心深いという点で非常に重要な人物であるペーターのおばあさんの陰が非常に薄くなっている。というのもアルムに帰った時ゼーマン家からお金が渡され、ハイジはそのお金で白パンをおばあさんに買ってあげることにするという話が、この訳本の中ではお金だけはしっかりといただいているのだが、白パンの話はなく、どこにこのお金が使われたのか不明である。またクララが歩けるようになったお礼にハイジはフランクフルトで自分の使っていたベットをおばあさんに送って欲しいとお願いするというモチーフがこの訳本から姿を消している。その他にペーターがやきもちをやいてクララの車いすを突き落とし、クララのおばあさまが神の罰について語って反省を促すというモチーフもここでは全く変えられている。というのもペーターとクララはすぐになかよくなってしまうからである。しかしどうしたことが、車いすのモチーフを省くことはできなかったのか、「ペーターはヤギを追いかけていて、モミの林の中にあつた車いすを誤って谷までころがしてしまう」。それでしかたがなく牧場にも行かずに立つ練習を始めて、おじいさんに励まされて歩けるようになってしまう。おばあさまとゼーマン氏が迎えにきたものの、おじいさんの死後ハイジの面倒を見るという約束や、医者が訪れていないために当然彼がハイジを養女にするという結末もない。つまり神への信仰に関する一切のことを省こうとするあまり、結論やハイジのやさしさまでもがねじ曲がってしまったことになる。

徳永寿美子訳『偕成社なかよし絵文庫 アルプスの少女』²⁾では、ロッテンマイヤー女史が家庭教師になっているため、クララのおばあさまが自らハイジに字を教えている。しかし神への信仰はここでも教えられていない。アルムに帰ってからは、おじいさんは社会復帰はし

ないのだが、なぜか学校には行かせている。ペーターのおばあさんに賛美歌を読んであげるのも帰ってからすぐではなく学校に行き始めてからだ、ペーターに字を覚えさせるということもない。というのもこの物語の最後で明らかになるのだが、ペーターはお金がなくて学校に行けないことになっている。そこでゼーゼマン夫人はごほうびとして学校にいく資金を出してくれることになるというのである。またこの問題とは直接関係ないことだが、この本には次のようなおかしい点もある。クララがフランクフルトに帰る前の場面であるが、

「はいじ。ふゆやすみに なったら、すぐに うちへ きてよ。まってるわ。」

「きつと いくわ。なつになったら、くららが 山へ くるのよ。」

「いったり きたり、うれしいわね。」³⁾

そもそも最初のアムでの生活においても、おじいさんがペーターの家を直すことも、牧師が訪ねてくることもなく、フランクフルトでは教会の塔に登る話や白パンの話もなく、ゼーゼマン氏も帰宅することはないので泉の話もないのである。こんな状況でどうして夢遊病になったのか原因が明白でない上、病気になってしまうほどいやだったはずのフランクフルトの家にハイジが冬になったら行くというのはいったいどこからでてきた話なのか理解することはできない。しかしこの話はこの本だけではない。大野芳枝訳『子どものための世界名作文学5 アルプスの少女』⁴⁾でも最後にハイジとクララが全く同じ会話をしている。またここではクララのおばあさまから神へ祈ることを教えてもらうのだが、ハイジは放蕩息子の話もせずたった一言で簡単におじいさんを社会復帰させてしまっている。ハイジは帰ってきたその日に早速こう言っている。

「ねえ、おじいさん、いっしょにおいのりしましょう。わたしが、ここに帰れたのも、毎晩、おいのりしたからよ。」⁵⁾

おじいさんは

「わしはおいのりなんか、，，。」⁶⁾

といったものの、ハイジの眠っている姿をみながら懺悔し翌日教会に行く。ということはハイジが帰ってきた日は土曜日ということになるが、この点もおかしい。原作ではどうやら金曜日に帰ってきたらしい。翌日の土曜日にペーターのおばあさんに賛美歌を読んであげた帰り道に、ハイジは一生懸命神への信仰がいかにすばらしいことなのかをおじいさんに訴えかけ、帰るとクララのおばあさまにいただいた絵本を取り出して放蕩息子の話を読み、その夜

おじいさんが懺悔して、その翌日の日曜日に教会へ行くのである。またここでも賛美歌を読んであげることも、ペーターに字を教えることもない。つまり字を覚えた目的が全く反映されていないのである。たった一言で懺悔したり社会復帰させてしまったことでおじいさんのそれまでの社会との深い葛藤も疑わしいものになり、神への信仰もあさはかに思えてくる。

酒井朝彦訳『幼年世界名作全集 アルプスの少女』⁷⁾では、ハイジはクララのおばあさまからお祈りすることを教えてもらっているのにもかかわらず、おばあさんに賛美歌を読んであげることも、おじいさんの社会復帰も、医者が山にくることもない。つまりそのあと神に関することが一切省かれている。いったい何のためにお祈りすることや字を教えてもらったのかがまったくわからなくなってしまう。

キリスト教の欠落は、作品に大きな影響を及ぼした。ハイジに放蕩息子の話をして聞かせて、信仰と祈りと同時に字を教えたおばあさまが、ただ本を読んで聞かせて字を教えるだけの存在になった。そうすると、ハイジがアルムに帰っておじいさんに信仰を取り戻させるきっかけが失われてしまうのだ。これは、『ハイジ』の第1部、『ハイジの修業と遍歴の時代』の眼目であったはずである。

注

- 1) 1957年 実業之日本社。
- 2) 1958年 偕成社。
- 3) 徳永寿美子訳 偕成社なかよし絵文庫 『アルプスの少女』1957年。
実業之日本社 S.160-161.
- 4) 1978年 集英社。
- 5) 大野芳枝訳 子どものための世界名作文学5 『アルプスの少女』S.106.
- 6) 大野芳枝訳：S.106.
- 7) 1956年 あかね書房。

第2章 アニメーションの問題

序

これまでも取り挙げてきた『アルプスの少女ハイジ』¹⁾のアニメーションは1974年に放映されたが、何度も再放映され、日本にハイジブームを巻き起こした。今回はこのアニメーションを原作と比較し、より詳しく考察してみたい。

注

- 1) 演出—高畑勲，脚本—佐々木守，場面構成・画面構成—宮崎駿。

第1節 山の生活での相違点

ハイジが山にきてからフランクフルトに連れていかれるまで約3年間のエピソードが原作には少ないという感もある。しかしここではその空白を埋めるために原作にはまったくないお話が組み込まれている。

大きな相違点はヨーゼフと呼ばれるセントバーナード犬の創作である。この犬はこの山の上の生活でかなり重要な役目をもっている。

第4話ではハイジは牧場で怪我をしたひな鳥を見つけ、「ピッチ」と名付けて第8話で飛び立っていってしまうまで世話をする。この小鳥の話もここでの創作であるが、この「ピッチ」が火に飛び込んでしまいそうになるのを助けるのがこのヨーゼフである。また第5話でペーターとハイジが逃げ出したやぎを捜しているうちに霧がたちこめ、道に迷ってしまうが、その時にもヨーゼフが助けにやってきて、おじいさんの待っているところまで道案内する。なぜ他の種類の犬ではなく、セントバーナードでなければならないのかという説明は、第11話であきらかになる。天気の良い朝に2人の男が鹿狩りのために山に登ってくる。ハイジはおじいさんがもう2時間もすると吹雪になるというので、一生懸命2人を引き止めるのだが、男たちは全く聞き入れずにもっと上へ登っていってしまう。おじいさんが言ったようにやがて吹雪になるが、ハイジがとても心配するので、おじいさんがヨーゼフを連れてでかけ、苦労しながら1人はおじいさんが、もう一人はこのヨーゼフが背負って帰ってくる。セントバーナード犬は山で人命救助の際活躍する犬である。まさしくこのエピソードのためにこの種類の犬が選ばれたのであろう。それだけではない。第14話でペーターとハイジが崖から落ちそうになったところを下に落ちないように食い止めたのも、また時にはペーターのかわりにやぎの番をするのもこの犬である。

またアニメーションではデーテの印象を少しでもよくするためであろうか、第5話でデーテからハイジのことを心配しているようすや、またしばらくしたら迎えにきたいという内容の手紙が届いている。

原作で不明な点を補足している部分もある。原作においてフランクフルトでロッテンマイヤー女史に白パンと一緒に捨てられそうになった帽子をハイジはとても大切にしていたが、何故かというフランクフルトに連れていかれる時、おじいさんがデーテに向かって言った言葉、つまり

「勝手にあの子を連れて行って、だめにしまえ！ あの子を連れて二度と私の前にでてくるな。あの子が今日のお前のように羽のついた帽子なんか被ってしゃべりたてるのなんか見たくもない！」

>> Nimm's und verdirb's! Komm mir nie mehr vor Augen mit ihm,
ich will's nie sehen mit dem Federhut auf dem Kopf und Worten
im Mond wie dich heut! <<

と言ったのをハイジは聞いたため、山に帰る時には絶対に必要と考えていた。しかしその出所はあきらかになっていない。ここではこのおじいさんの言葉はないのだが、大切にしていた理由を第13話で明らかにしている。この帽子はおじいさんが町に行った時におみやげとして買ってきたものなのである。つまりおじいさんとの思い出の品に作りかえられている。

その他に原作にないエピソードとして、第14話において原作でいう「小雪」が「雪ちゃん」という名前で登場し、成長が遅いためいい乳を出さないので殺されることになり、それを阻止するためにハイジは「雪ちゃん」にいい薬草を捜して食べさせ、いいお乳がでるように奮闘する。この問題は第15話の中で「雪ちゃん」がいい乳を出すようになって解決している。

注

- 1) Johanna Spyri: Heidi • Lehr- und Wanderjahre, Cecile Dressler Verlag Hamburg 1993, S.84-85.

第2節 フランクフルトにおける相違点

1. 子猫の問題

原作には一つ大きな疑問がある。それはハイジが教会からもらってきた子猫が、セバスチャンの配慮で捨てられずに屋根裏部屋で匿われて飼われることになる。しかしそのあとのようすは、セバスチャンがハイジを慰める場面で、

「子猫も楽しそうに元気にしていますよ。屋根裏部屋を跳ね回って、まるで
きちがいみたいです。ロッテンマイヤーさんがいなくなったら、あとで

いっしょに上がって見ましょうよ。」

>> Die Kätzchen sind auch lustig droben, die springen auf dem ganzen Estirich herum und tun wie närrisch. Nachher gehen wie mal zusammen hinauf und schauen ihnen zu, wenn die Dame drinnen wieder weg ist, ja?<<¹⁾

と言うのだが、実際にセバスチャンがハイジと子猫を見に行ったこともなく、それきり子猫の話に触れられることはない。そのあとといった子猫はどうなったのだろうか？ まったく不明である。

アニメーションではその疑問に答えを出している。ハイジは第23話で子猫を1匹だけもらってくるのだが、ハイジとクララはこの子猫に「ミーちゃん」という名前をつけ、原作と同様、セバスチャンに匿ってもらう。教会から届けられた他の子猫は捨てられてしまうのだが、「ミーちゃん」だけは残され、ハイジはその後、雷が鳴る夜に子猫が恐がっていないか心配して子猫がいる屋根裏部屋に上がっていったり、こっそり自分の部屋に連れてきて一緒に寝たりしている。そして第24話でロッテンマイヤー女史の留守中にクララと一緒に遊んでいるが、忘れ物を取りに帰ってきたロッテンマイヤー女史に見つかってしまい、本当に捨てられることになってしまう。しかしまたセバスチャンの配慮で彼の知人の所にもらわれていたというのが子猫の運命である。このように原作で不明な点がここでは次々と補足され、創作され、明らかにされている。

注

- 1) Johanna Spyri: Heidi • Lehr - und Wanderjahre, Cecile Dressler Verlag Hamburg 1993, S.136.

2. 地下室

第21話ではハイジはクララの小鳥を逃がしてしまう。そのために地下室に入れられてしまう。この地下室のことも原作では話題にはなるが、クララの願いが反対したので入れられないはずなのだが、この話題はおもしろいと思ったのか、ハイジがそこからネズミを連れてくる、という騒動を起こす事件に創作されている。

3. ゼーゼマン夫人

フランクフルトの良家の老婦人ゼーゼマン夫人は家柄にふさわしい、やさしくて、穏やかで、敬虔な貴婦人である。しかしアニメーションにおいてはこのゼーゼマン夫人のイメージも優しいが、明るく、楽しくて幾分かおてんばな性格をもった老婦人に変えられている。

フランクフルトに到着した時にはくまのぬいぐるみを着て馬車の中から降りてきて、動物嫌いのロッテンマイヤー女史を驚かせ、2人の子供たちを楽しませる。夕食時にはグラスや皿をたたいて音楽を奏で、ロッテンマイヤー女史をあきれさせる。ハイジと階段で遊んだり、人形劇を試みたり、また第28話ではハイジを励まし、クララにも自然に触れさせようとフランクフルト郊外の森に連れて行く。帰宅するとクララが熱を出しているのだが、ハイジがクララのために医者薬を取りにいったり、クララを元気づけるためにヨハンの馬車で一人で森に行き、籠いっぱいのお花を持って帰ってきたりとそこからまた話が展開している。帰る時にもちょっとしたパーティを催し、子供たちを楽しませている最中に馬車に乗って去ってってしまう。彼女はハイジを楽しませるためだけの存在で、ゼーゼマン夫人の滞在中ハイジが泣くのは、彼女が美術品が保管されている秘密の部屋に連れていった時、その部屋に掛かっている大きな絵を見た時だけである。いつも次々と楽しいことばかりが起こり、ロッテンマイヤー女史から怒られそうになった時にいつでも守ってくれるのだ。そのため字は絵本を与えて字を読むことの楽しさは教えているが、暗い顔をする事はないし、また神に祈ることは教えていない。そのため山へ帰ってからペーターのおばあさんに賛美歌を読んであげることがあっても、その他の宗教的なエピソードは省略されるか、あるいは別の形に変えられている。しかしここでは彼女はハイジが夢遊病になってしまう原因を作ったとも言える。というのも彼女の滞在中の期間、楽しい思いをしたからこそ、そのあとのロッテンマイヤー女史の厳しいしつけにますます耐えられなくなってしまうということが強調されているからだ。

4. ハイジの夢遊病

ハイジが夢遊病にまで追いつめられていくあきらかな原因が創作されている。原作では次第に山への憧憬が強くなって、本を読んで泣いてしまい、現実と非現実の区別がつかなくなり、ついにロッテンマイヤー女史に今後わけのわからないことを言って泣くのであれば、絵本を取りあげてしまうと言われて追い込まれていく。しかしその時にはもうすでに精神状態が不安定であったとも言えるので、彼女の言葉が原因だったとは考えにくい。おばあさまに神に祈って楽になることを教えてもらったのに、どうして追いつめられていったのか、不明な点が多いのも確かである。

しかしここではハイジのクララへの思いやりがすべての原因である。ハイジが山に帰った

がっているのをみてクララが不安になり、それを知ったロッテンマイヤー女史がクララが病気になるのではないかと懸念し、ハイジにクララの病気が重くなってしまうからもう二度と山のことを思い出すことも話すこともしてはいけないと言う。ハイジはクララのために山のことを口にしないことにする。そしてゼーゼマン氏が山へ帰れることを告げに行った時にも一瞬喜ぶものの、すぐに沈んだ声でこう言う。

「だめだわ。あたし、山に帰っちゃいけないわ。ここにいないてはいけないわ。だってクララが、クララが。私が帰ったらクララが一人になっちゃうもの。」¹⁾

ゼーゼマン氏はハイジがそんなにもクララのことを思っていてくれることに感動する。つまり夢遊病になってしまったのは、根本的には彼女のやさしさゆえなのである。

幽霊騒ぎを解明するためにゼーゼマン氏と医者が必要で夜中まで起きていることになるが、どうして医者が呼ばれたのかという疑問がある。結果的に医者はハイジの病気を診断する必要があったのでその場にいないてはならない存在だが、呼ばれた時にはあくまでも幽霊の正体を追究するためであって、ハイジが病気だとは全く予想もつかないのである。訳本の中には「ゼーゼマン氏の友人だから。」という理由づけをしているものもあるが、やはり原作において不明な点の1つである。そんな疑問にもこのアニメーションでは答えが出ている。ゼーゼマン氏は幽霊と聞いて、「科学者の目」で見てもらった方がいいかもしれないと判断している。

注

- 1) 1974年放映『アルプスの少女ハイジ』第34話より。

5. その他の相違点

ここではおばあさまが帰ってからの山に帰されることになるまでがわずか2話で収められている。原作では春に帰されるので、フランクフルトに滞在したのは約1年、この期間は半年近くあるはずである。そしてその年の9月に医者がきて、クララが来るのは翌年の6月の終わりである。しかしここではあたかもすぐに病気になってしまったかのごとく、この期間の創作が全くなく説明もない。そのために季節にも無理が生じている。まるで夏の終わりあ

るいは秋に山に帰ったようである。というのもそのあとすぐに冬の出来事になっているからである。そして医者春にやってきて、その夏すぐにクララが山へきているので、ほぼ1年の誤差が生じている計算になる。原作で不明な点を説明する他、山の上での3年間という生活の長さを補うためにさまざまなエピソードを創作し、たとえば原作に「地下室」が出てくれば、それをすぐにおもしろおかしく話に結びつけているにもかかわらず、フランクフルトに滞在する期間を短くし、このような誤差を生じさせ、さらに原作にはあるのにここで省略されてしまった例としてデーテのことが挙げられるが、彼女がハイジが山に帰される時「今は来られない。」と返答をよこすだけで、実際にゼーゼマン家を訪問してまわりくどく送っていけない言い訳することがないのはどうしたことだろうか。

このアニメーションには原作及び現実も合わない点がある。それはフランクフルトからマイエンフェルトまで向かう列車のことである。原作ではバーゼルで一泊していることになっているのだが、ここではフランクフルトから夜通し列車が走って、明るくなってからおそらくバーゼルで乗換をして、マイエンフェルトまで向かっている。いくら当時の列車が遅いといっても、時間がかかりすぎているのだ。実際、フランクフルトからバーゼルまでは約330km、バーゼルからマイエンフェルトまでは約200kmあり、今なら約7時間ほどで行ける距離なのだが、当時の列車事情を考えて推測すると、たとえばハイジがフランクフルトをお昼頃に出発したのだと仮定すると、時速40kmで約8時間かかる。つまりバーゼルに夕方、あるいは夜到着して、1泊し、翌朝10時頃汽車に乗って、約5時間かかったとして、マイエンフェルトに午後3時に到着する。そこからパン屋との交渉の時間を含めデルフリまで約2時間とすれば、原作の通りデルフリで午後5時を知らせる鐘を聞くことができる。そこからペーターのおばあさんにパンを渡して、おじいさんの山小屋に向かう途中で夕日を見ながら神に感謝している場面があるが、季節は夏前なので、スイスは日が長く、午後7時頃に夕日を見ていてもおかしくはない。きちんとつじつまがあうのである。しかしこのアニメーション通りに推測すると、同様にお昼に出発したのだとすると、フランクフルトからバーゼルまで約20時間近くかかっていることになり、ということは汽車が時速16kmで走っていたことになるが、これは馬車や自転車より遅いか、ほぼ同じになってしまう。330kmの距離を20時間かかったのだから、そこから200kmもある道のりを、バーゼルで朝6時に乗り換えたとしても、同じ時速では約12時間半かかり、マイエンフェルトに着くのは夕方6時か7時。そこからさらに3時間から4時間かかるわけだから、明るいうちに山に帰ることは不可能であるはずだ。山に帰る道のりが長ければ長いほど、ハイジが山に帰った時の感動が大きくなるという効果をねらったためであろうか。しかし街並やアルプスの自然描写が正確であるにもかかわらず、なぜこのような矛盾が生じてしまったのだろうか。

第3節 その後の山の生活での相違点

1. キリスト教の欠落

このアニメーションからは全くキリスト教的な要素が省かれている。その結果、シュペーリにとって非常に嘆かわしいことだが、まず第一におじいさんの社会復帰がなくなっている。

そもそもこのアニメーションではおじいさんが山に引き籠もってしまった理由もなぜ神と仲違いしているかも明らかにされていない。ただ恐ろしいと村人から嫌われているだけなのである。ハイジが説得することも本を読むこともないので、懺悔もしなければ、教会へ行くシーンはない。ただハイジが字を読めるようになったのを見て学校に行かせる決心をし、冬の間は山を降りてデルフリ村で生活することにするのだが、その家の所有者はわからない。挨拶程度はするようになったものの、最後まで村人と和解したようすはないのである。

前述したように第41話でフランクフルトの医者が翌年の春に山を訪問するのだが、娘を失った事実もないので、ハイジの慰めの必要はないのだ。彼は山がクララにとって適切な場所かどうかを確認するための目的でやってきたのであって、その他の理由はない。その上わずか1泊して帰ってしまう。そのため最後に彼がスイスに引っ越してくることも、ハイジを養女にするという話もなくなってしまったことは言うまでもない。

ペーターが車いすを突き落とすこともない。ペーターはハイジが山の牧場に来ない時には不機嫌になることもあるが、クララにやきもちをやくことはない。彼は最初から最後までクララに親切である。ハイジと2人で計画してクララをおぶったり、自分で背負子を作ったりして牧場まで連れて行ってあげる。だからといって車いすが壊れないわけではないのだ。原作では車いすがなくなってしまったために立つ決心をするが、ここではクララが立てるようになったのは、牛に驚き、逃げようと思わず立ってしまったのが最初で、それから一生懸命に練習した結果である。車いすが壊れるというモチーフは別の教訓のために用いられている。クララは歩く練習をしている間に、もう車いすに頼らない決心をした。それで車いすは物置にしまわれる。しかしクララは練習がうまくいかなくなると、車いすがこいしくなって物置に向かうのだが、つまづいて突き落としてしまう。クララは決心が揺らいでしまったことを恥じて泣き、反省するのである。

2. ロッテンマイヤー女史

原作ではセバスチャンから山は恐ろしい所だと聞いて、山には全く姿を見せないはずのロッテンマイヤー女史が、このアニメーションではゼーゼマン夫人の代わりにクララを連れてくる。彼女は山の上ではなく、デルフリハイジとおじいさんの冬家に滞在し、毎朝ペーターと一緒に山へ登ってくる。ここでも彼女はクララに淑女としてのしつけや教育に精を出す、その度におじいさんに対立している。本来厳粛であるが、品のいい彼女はここでは完全にピエロ的な存在に描写されている。彼女の動物嫌いが利用されてヨーゼフややぎが近づいてくると悲鳴を上げて気絶したり、今まではいたことがないズボンをはいて雨の中を泥だらけになって山の牧場まで登っていったり、大騒動している姿が滑稽に描写されている。彼女の悪いイメージをうち消すためであろうか、あるいは単に物語をおもしろく仕上げるためだろうか。彼女の淑女のイメージがまったく打ち消されてしまっている。

第3章 総 論

上述してきたように、これまで出版されてきた『ハイジ』の訳本には、原作に忠実でない訳をしたり、全く異なった物語が創作されてしまっているケースが多数あるのだが、金銭の問題を例にとると、日本円に換算するならともかく、日本でもスイスでもドイツでも使われていないドルやポンドで表示していることからみても、これらはみなドイツ文学者ではなく、ドイツ語の知識がない訳者が英語版から翻訳したか、あるいは別の訳本からのいわば和文和訳であると推測できる。なぜドイツ語の知識のない人が翻訳しようとしたのか、また、実際にこの種の訳本が出版されてしまったのか疑問である。ここ約30年間で訳された本はほとんどドイツ文学者によるものであるが、省略されているにせよ、むしろそれらに疑問点はない。むしろ英語から翻訳された本がすべておかしいのではない。前回の論文の中で取りあげたハイジの続編『それからのハイジ』¹⁾『ハイジのこどもたち』²⁾の翻訳者各務三郎氏は自分の翻訳『アルプスのハイジ』の「まえがき」の中でこの本が英語からの翻訳であることを述べている。しかしこの訳本は完訳であるため省略されたり変えられたりしていない上、彼自身もこの中で述べているが、英語から訳すとおかしな点はすべて修正してあるため、ここで問題とした金銭の訳などにおかしなところは全くないのである。本来、ドイツ語の原書から翻訳するということが基本であるが、最も問題とすべき点は、翻訳者がその国の文化的な状況を理解していない、あるいは研究すらしていないという点であろう。そしてやはり物語にとっては、どのエピソードも非常に重要な意味を持っているので、省略されたり、訳者による創作ともいえるほどにおかしく変えられてしまうことは遺憾である。やはりドイツ語の知識のある人間がドイツ語版から完訳するということが基本であろう。

一方アニメーションにおいては、翻訳で問題としている箇所には不自然さは感じられないのだが、これまで述べてきたように原作の疑問点あるいは不足分を補い、また創作されたエピソードが多く含まれている。

『ハイジ』には悪人は存在しない。全員が善良な人間である。そのため読者を緊張させたり、不安にさせたりする、推理小説的な要素は全くない。しかしここではさらに原作より全員がやさしい人間にそのイメージが作りかえられていると言っていいだろう。敬虔でおしとやかなゼーゼマン夫人もここではやさしいだけの愉快的な人物に変えられ、そして厳格であるロッテンマイヤー女史は本当は善良な人物であるということを明白に理解させるためだろうが、山の上まで連れ出し滑稽な姿で描写されている。ペーターもやきもちをやくこともなく、クララを元気づけ、協力的である。

そもそも『ハイジ』は自然児ハイジが神への崇拝を知り、お祈りをし、それを通じてかたくなだったおじいさんを社会復帰させ、ペーターのおばあさんに賛美歌を読み、パンを贈り、娘を失ったフランクフルトの医者を立て直らせ、クララを歩けるようにするという、みんなに至福を与える物語である。つまりこれはハイジの大きな愛の物語である。読者はハイジの愛に感動するべきである。しかしこのアニメーションでは宗教性を全くなくしてしまったことからこの基本線から明らかにはずれてしまっている。そして上述したように全員がやさしい人間になってしまったために、むしろハイジの愛情度が薄まってしまった感がある。アニメーションはシュピーリの描こうとした「愛」ではなく、ハイジのかわいらしさ、そしてクララが歩くという感動的なクライマックスがその人気の鍵になっている。しかしながらクララの奇跡は彼女自身が歩けるようになりたいと心底願い、一生懸命に練習した結果である。つまりこれはシュピーリの「よいことはすべて神のおかげ」という思想からあきらかにはずれているということである。

注

- 1) トリッテン, シャルル作 (1979年, 読売新聞社).
- 2) トリッテン, シャルル作 (1980年, 読売新聞社).

(本学講師＝ドイツ語担当)

参考資料：ヨハンナ・シュピーリ『ハイジ』日本語翻訳本データ

書籍題名	訳者及び編者名	出版社	発行年月
世界少年文学名作集 第8巻『ハイヂ』	野上彌生子	家庭読物刊行会	1920年
『楓（かえで）物語』	山本憲美	福音書館	1925年
岩波文庫『アルプスの山の娘（ハイヂ）』	野上彌生子	岩波書店	1934年
世界繪入童話『アルプスの少女』	秋葉かずお	岩井書店	1947年
スウィス童話集 1『アルプスの少女』	遠藤正子	日新書院	1948年
世界少年文学選集『ハイジ物語』	近藤東	大雅堂	1948年
『アルプスの少女』	吉田絃二郎	講談社	1949年
中学生全集 1『アルプスの山の乙女』	野上彌生子	筑摩書房	1950年
『アルプスの少女』	馬場正男	千代田書房	1950年
世界の絵本 中型版 8『アルプスの山の娘』	林芙美子	新潮社	1950年
世界名作文庫 11『アルプスの少女』	水島あやめ	偕成社	1950年
角川文庫『アルプスの少女ハイジ』	関泰祐・阿部賀隆	角川書店	1952年
岩波少年文庫 40『ハイジ 上』	竹山道雄	岩波書店	1952年
岩波少年文庫 41『ハイジ 下』	竹山道雄	岩波書店	1952年
世界名作全集 23『アルプスの少女』	吉田絃二郎	大日本雄弁会講談社	1952年
保育社の名作絵文庫 6『アルプスの少女』	石田武雄	保育社	1953年
世界少年少女文学全集 17（ドイツ編4） 『アルプスの山の少女ハイジ』	植田敏郎	創元社	1953年
世界名作漫画文庫 44『アルプスの山の娘』	滝沢みち子	曙出版	1953年
学級文庫 2・3年生『アルプスの少女』	中村一雄	日本書房	1954年
名作物語文庫 35『アルプスの少女物語』	堀寿子	講談社	1955年
新潮文庫『アルプスの山の少女』	植田敏郎	新潮社	1956年
若草文庫『アルプスの少女』	国松孝二・城山良彦	三笠書房	1956年
幼児へのお話の本 世界名作十二月 4月-6月 『アルプスの山の少女』	小出正吾	実業之日本社	1956年
児童名作全集 18『アルプスの少女』	後藤梢根	偕成社	1956年
幼年世界名作全集 15『アルプスの少女』	酒井朝彦	あかね書房	1956年
世界少年少女名作選集『アルプスの少女』	谷村まち子	同和春秋社	1956年
世界の名作 2『アルプスの山の娘』	野上彌生子	筑摩書房	1956年
世界絵文庫 27『アルプスの少女』	北条誠	あかね書房	1956年
世界名作物語 11『アルプスの少女』	堀寿子	黎明社	1956年
保育社の幼年名作全集 10『アルプスの少女』	上田健次郎	保育社	1957年
名作絵文庫 3年生『アルプスの少女』	江間章子	実業之日本社	1957年
少年少女物語文庫 たのしい名作童話 12 『アルプスの少女』	馬場正男	ポプラ社	1957年
影絵アルバムII 世界の名作 『アルプスの山の少女』	藤城清治	さえら書房	1957年
新選世界名作選集『アルプスの少女』	城夏子	東光出版社	1958年
なかよし絵文庫 36『アルプスの少女』	徳永寿美子	偕成社	1958年
『アルプスの少女』	小倉ゆり子	中央出版社	1959年

世界幼年文学全集 23 『アルプスのやまのむすめ』	川端康成等	宝文館	1959年
少年少女世界文学全集 4 ドイツ編 7 『アルプスの少女』	関泰祐	講談社	1959年
世界少年少女文学全集 16 『アルプスの山の少女ハイジ』	植田敏郎	東京創元社	1960年
世界名作全集 第19巻『アルプスの少女』	関泰祐・阿部賀隆	平凡社	1960年
少年少女物語文庫 第12巻『アルプスの少女』	田島準子	集英社	1960年
世界少女名作全集 37『アルプスの少女』	伊藤佐喜雄	偕成社	1961年
幼年世界文学全集 10『アルプスの少女』	川崎大治	偕成社	1961年
学年別世界児童文学全集 2・3年 『アルプスの少女』	木村隆治	日本書房	1961年
スピリ少年少女文学全集1『アルプスの少女』	国松孝二	白水社	1961年
少年少女世界名作全集 18『アルプスの少女』	塩谷太郎	講談社	1961年
児童世界文学全集 14『アルプスの少女』	高橋健二	偕成社	1961年
少年少女世界名作文学全集 第12巻 『アルプスの少女』	高橋健二	小学館	1961年
世界名作童話全集 15『アルプスの少女』	植田敏郎	講談社	1963年
幼年文庫『アルプスの少女』	木村隆治	日本書房	1963年
世界名作童話全集 15『アルプスの少女』	稗田幸子	ポプラ社	1963年
世界少女名作全集 1『アルプスの少女』	村岡花子	岩崎書店	1963年
少年少女新世界文学全集 15 (ドイツ古典編 2) 『アルプスの少女』	山口四郎	講談社	1963年
世界名作絵文庫 17『アルプスの少女』	山主敏子	あかね書房	1963年
保育社の幼年名作全集 7『アルプスの少女』	上田健次郎	保育社	1965年
世界のひらがな童話 14 『あるぶすのやまのむすめ』	川端康成	岩崎書店	1965年
世界の名作 10『アルプスの少女』	山口四郎	講談社	1965年
少年少女世界の名作 ドイツ 3 『アルプスの少女』	植田敏郎	小学館	1966年
学級文庫の二, 三年文庫『アルプスの少女』	木村隆治	日本書房	1966年
世界の名作図書館 17『アルプスの少女』	塩谷太郎	講談社	1966年
少年少女世界の名作 2『アルプスの少女』	田島準子	集英社	1966年
世界名作全集 23『アルプスの少女』	山本藤枝	講談社	1966年
少年少女世界の文学 19『アルプスの山の少女』	植田敏郎	河出書房	1967年
母と子の名作文学 7『アルプスの少女』	桂木寛子	集英社	1967年
世界の幼年文学 カラー版 11 『アルプスの少女』	岸なみ	偕成社	1967年
小学館名作文庫 6『アルプスの少女』	高橋健二	小学館	1967年
なかよし絵文庫 36『アルプスの少女』	徳永寿美子	偕成社	1967年
角川文庫『アルプスの少女ハイジ』	関泰祐・阿部賀隆	角川書店	1968年
世界の名著 20『アルプスの少女』	藤田圭雄	ポプラ社	1968年
少年少女世界の文学 カラー名作 17 (ドイツ 1)『アルプスの少女』	榎本ナナ子	小学館	1968年
マーガレットコミックス『ハイジ』	わたなべまさこ	集英社	1968年
旺文社ジュニア図書館『アルプスの少女』	石中象治	旺文社	1969年

世界の名作図書館 1『アルプスの少女ハイジ』	酒井朝彦	評論社	1969年
オールカラー版世界の童話 27	波多野勤子他	小学館	1969年
『アルプスのしょうじょ』			
ニューメソッド 独文対訳シリーズ 4A	藤田五郎・下山峯子	評論社	1969年
『Heidi』			
文研児童読書館 外国名作27	山口四郎	文研出版	1970年
『アルプスの山の娘』			
たのしい名作童話 7『アルプスの少女』	馬場正男	ポプラ社	1971年
こども世界の名作 7『アルプスの小女』	神戸淳吉	金の星社	1972年
世界少女名作全集 1『アルプスの少女』	村岡花子	岩崎書店	1972年
カラー版 世界の名作 8『アルプスの少女』	谷村まち子	ポプラ社	1972年
少女名作シリーズ 26『アルプスの少女』	伊藤佐喜雄	偕成社	1973年
児童名作シリーズ 28『アルプスの少女』	後藤檜根	偕成社	1973年
学研世界名作シリーズ 2『アルプスの少女』	関楠生	学習研究社	1973年
世界名作ものがたり『アルプスの少女ハイジ』	辻真先	朝日ソノラマ	1974年
幼年童話 10『アルプスの少女』	馬場正男	ポプラ社	1974年
福音館古典童話シリーズ 13『ハイジ』	矢川澄子	福音館書店	1974年
少年少女講談社文庫 A-44『アルプスの少女』	山口四郎	講談社	1974年
ワイドカラー版少年少女世界の名作 2 8巻	植田敏郎	小学館	1975年
ドイツ編1『アルプスの少女』			
マーガレット文庫 世界の名作 4	内山登美子	集英社	1975年
『アルプスの少女』			
多摩川こども図書館『アルプスの少女ハイジ』	大畑末吉	玉川大学出版部	1976年
春陽堂少年少女文庫 世界の名作日本の名作	植田敏郎	春陽堂書店	1977年
『アルプスの少女ハイジ 上』			
春陽堂少年少女文庫 世界の名作日本の名作	植田敏郎	春陽堂書店	1977年
『アルプスの少女ハイジ 下』			
少年少女世界の文学 11『アルプスの少女』	植田敏郎	暁教育図書	1977年
小学文庫『アルプスの少女』	木村隆治	日本書房	1977年
偕成社文庫3030『ハイジ (第一部)』	国松孝二・鈴木武樹	偕成社	1977年
偕成社文庫3031『ハイジ (第二部)』	国松孝二・鈴木武樹	偕成社	1977年
少年少女世界名作全集 35『アルプスの少女』	名木田恵子	主婦の友社	1977年
国土社版世界の名作 14『アルプスの少女』	山口四郎	国土社	1977年
子どものための世界名作文学 5	大野芳枝	集英社	1978年
『アルプスの少女』			
こども世界の名作 1『ハイジ』	岡上鈴江	ぎょうせい	1978年
世界名作ものがたり 3年生『アルプスの少女』	川崎大治	偕成社	1979年
ポプラ社文庫『アルプスの少女』	瀬川しのぶ	ポプラ社	1979年
『アルプスのハイジ 上』	各務三郎	読売新聞社	1981年
『アルプスのハイジ 下』	各務三郎	読売新聞社	1981年
『ハイジ 1 遊んで、学んで、旅をして』	山本太郎	化出版局	1981年
『ハイジ 2 学んだことが、役にたつ日々』	山本太郎	文化出版局	1981年
フラワーブックス『アルプスの少女』	池田香代子	小学館	1982年
少年少女世界の名作 4『アルプスの少女』	松代洋一	集英社	1982年
世界の名作 国際児童版 18	塩谷太郎	講談社	1984年
『アルプスの少女ハイジ』			

岩波少年文庫2003『ハイジ 上』	竹山道雄	岩波書店	1986年
岩波少年文庫2004『ハイジ 下』	竹山道雄	岩波書店	1986年
世界こども名作全集 学習版 第7巻 『アルプスの少女ハイジ』	高橋健二・金田一春彦	小学館	1986年
少年少女世界名作全集 33『アルプスの少女』	足沢良子	ぎょうせい	1983年
やさしい英語で楽しむ世界名作シリーズ 『アルプスの少女ハイジ』	A・リーバー	旺文社	1984年
少年少女世界文学館16『アルプスの少女』	池田香代子	講談社	1987年
世界名作物語シリーズ10 英語カセット文庫 『Heidi』	市川春子	旺文社	1987年
世界の名作 国際児童版 18 『アルプスの少女ハイジ』	塩谷太郎	講談社	1987年
野上彌生子全集 第2期 第21巻 『アルプスの山の娘-ハイヂ』	野上彌生子	岩波書店	1987年
こども世界名作童話 9 『アルプスの少女ハイジ』	若林ひとみ	ポプラ社	1987年
フォア文庫『アルプスの少女』	関楠生	童心社	1988年
新編少女世界名作選 12『アルプスの少女』	伊藤佐喜雄	偕成社	1989年
世界の名作ライブラリー 8 『アルプスのハイジ』	岡上鈴江	金の星社	1989年
レディバード・リーダーズ (Grade3) 『アルプスの少女ハイジ』	うつみ宮土理	南雲堂	1990年
英語で聞く世界の名作 4 『アルプスの少女ハイジ』		日本放送出版協会	1990年
講談社青い鳥文庫『アルプスの少女』	池田香代子	講談社	1991年
世界の少女名作 10『アルプスの少女』	村岡花子	岩崎書店	1992年
せかいの名作ぶんこ 36 『あるおすのしょうじょ』	岡信子	金の星社	1992年
国土社版世界の名作全集 14『アルプスの少女』	山口四郎	国土社	1992年
子どものための世界文学の森 5 『アルプスの少女』	大野芳枝	集英社	1994年
新装少年少女世界名作全集 33 『アルプスの少女』	足沢良子	ぎょうせい	1995年
旺文社ジュニア図書館『アルプスの少女』	石中象治	旺文社	1996年
小学館世界の名作 5『アルプスの少女ハイジ』	ささきたづこ	小学館	1998年
講談社英語文庫『Heidi』	Kirsten McIvor	講談社	1999年
大活字本シリーズ『ハイジ』	矢川澄子	埼玉福祉会	2000年
岩波少年文庫 106『ハイジ 上』	上田真而子	岩波書店	2003年
岩波少年文庫 107『ハイジ 下』	上田真而子	岩波書店	2003年

参 考 文 献

- Doderer, Klaus: Klassische Kinder- und Jugendbücher (Weinheim und Basel 1969)
Doderer, Klaus: Lexikon der Kinder- und Jugendliteratur (Weinheim und Basel 1975-1982)
Dyhrenfurth, Irene: Geschichte des deutschen Jugendbuches (Zürich und Freiburg i. Br 1967)
Hürlimann, Bettina: Europäische Kinderbücher (Zürich 1959)
Köster, Hermann Leopold: Geschichte der deutschen Jugendliteratur (Braunschweig 1927)
Spyri, Johanna: Heidi (Düsseldorf 1969)
Spyri, Johanna: Heidi・Lehr- und Wanderjahre (Cecile Dressler Verlag Hamburg 1993)
Spyri, Johanna: Heidi kann brauchen, was es gelernt hat (Cecile Dressler Verlag Hamburg 1994)
Wild, Reiner: Geschichte der deutschen Kinder- und Jugendliteratur (Stuttgart 1990)

ヨハンナ・スピリ作

- 池田香代子訳 『アルプスの少女』 (1987年 講談社)
伊藤佐喜雄訳 新編少女世界名作選12『アルプスの少女』 (1973年 偕成社)
上田健次郎訳 保育社の幼年名作全集10『アルプスの少女』 (1957年 保育社)
江間章子訳 名作絵文庫三年生 『アルプスの少女』 (1957年 実業之日本社)
大野芳枝訳 『アルプスの少女』 (1985年 集英社)
岡信子訳 『あるぶすのしょうじょ』 (1992年 金の星社)
小倉ゆり子訳 『アルプスの少女』 (1959年 中央出版社)
酒井朝彦訳 幼年世界名作全集 『アルプスの少女』 (1956年 あかね書房)
瀬川しのぶ訳 ポプラ社文庫 『アルプスの少女』 (1979年 ポプラ社)
田島準子訳 少年少女物語文庫9 『アルプスの少女』 (1957年 集英社)
谷村まち子訳 世界少年少女名作撰集 『アルプスの少女』 (1956年 同和春秋社)
徳永寿美子訳 偕成社なかよし絵文庫 『アルプスの少女』 (1957年 偕成社)
中村妙子訳 『アルプスの少女ハイジ』 (1991年 講談社)
平田昭吾訳 『アルプスの少女ハイジ』 (1991年 永岡書店)
若林ひとみ訳 こども世界名作童話9 『アルプスの少女ハイジ』 (1987年 ポプラ社)
野上彌生子訳 『アルプスの山の娘』 (1920年 岩波書店)
武鹿悦子訳 『ハイジ』 (1993年 チャイルド社)
関楠生訳 『アルプスの少女』 (1975年 学習研究社)
関楠生訳 『アルプスの少女』 (1988年 童心社)
山口四朗訳 外国名作27 『アルプスの山の娘』 (1970年 文研出版)
吉田絃二郎訳 世界名作全集 23 『アルプスの少女』 (1952年 大日本雄弁会講談社)

- NHK 取材班 『アルプスの少女ハイジ, 夢紀行』 (1990年 日本放送出版協会)
国松孝二編 『スピリ少年少女文学全集』 (1960-1961年 白水社)
国松孝二, 高橋義孝編 『現代世界文学講座4 ドイツ編』 (1956年 講談社)
日本独文学会編 『ドイツ文学辞典』 (1956年 河出書房)
波多野完治・島田謹二監修 『世界の児童文学』 (1967年 国土社)